

オランダ畫家としてはかりでなく、歐洲全土の最もすぐれた畫家の一人として、レムブランドを擧げることができる。彼の畫法は光の世界を創造した。彼の畫く陰には陰においてさへ一種の輝きがある。畫家の任務は、第二の自然を創造することにあるとすれば、彼の生涯の後半期に屬する作品の或ものは、たしかに第二の自然を創造し得た域に到達したものと云へよう。彼の畫面は種々な變化がある。厚塗の下地、また厚塗の仕上の方法や、グラッシイも採用した。しかし彼は畫面に特殊な光を創り出した。これは全く彼の獨得な畫法である。

今一人オランダの天才畫家は、ファン・デル・ミイヤ（一六三二——一六七五）であらう。彼はデルフトに住してゐたので、デルフトのヴェルミイヤとも呼ばれた。彼の畫法はレムブランドと異り、如何にも鮮明な美しい色彩畫面で、當時のオランダの他の畫家と比較して實に類を見ない。彼の四十三年のみじかい生涯中、十數點の傑作を遺したが、パリのルウヴル美術館收藏のたゞ一點の小品にせよ、アムステルダム

美術館收藏の十數點の作品は、何れも寶玉をちりばめたる如く美しい色彩に輝いてゐる。彼は、光を現すに細い點描を試みた。これは當時にありては、珍しい技法であつた。北歐の二大高峰に對して、南歐の二大高峰は、イタリーではヴェニス、チシアン、スペインではヴェラスケスであらう。

私が特にこれ等四人を擧げた理由は、彼等の使用した油繪具が大分、現在の繪具に近くなつてきた點から觀察したのである。従つて彼等の畫法は、各獨得なものにもかかはらず、近代畫家との間に、或共通した技法が織り込まれてゐるからである。勿論彼等の使用した繪具が、近代畫家使用のものと、全然同質なものといふのではない。彼等の時代と現代とでは、すでに多大な變遷を認める。しかし彼等以前の畫家の使用した繪具と比較すると、大分現代のそれに類似したもので、すくなくとも下地塗から油繪具を使用し得るやうになつたことは事實である。私はそれが油繪の健康上良いことか、或はかへつて良くないことかを知らない。しかし下地塗から油繪具を使用でき

るやうになつたのは、要するに繪具中の油が早く乾くやうになつたので、使用上便利になつたのに原因してゐると思ふ。

私が初めてパリへ行つたのは、千九百〇五年から十年で、そのつぎに行つたのは三十二年だから、約二十二年間を経て居るのだが、二度目の時に見たルクサンブルク美術館に陳列されてある、ロートレックの膠だけを塗つた畫布に畫いた繪が、ひどく黒ずんでしまつたのに驚いた。この油繪は、かなり大きな畫面だが、膠仕立の畫布へ人物を畫いて、餘白は畫布のまゝ残したために、その餘白は、ひどく黒ずみ、繪そのものも全體に、よごれて見苦しくなつてゐた。エンネルの繪など、大體繪そのものが健全でないのだが、度の強いシャンディ（畫面の微の如きくもり）のために畫面は殆ど見られなくなつてゐた。その他龜裂がひどくて畫格を損じてゐるもの（これは透明色を下に、不透明色を上塗つたり、完全に下が乾き切らないうちに、上へ厚い繪具をかけたりしたためである。）などあるが、かうした過失は作畫中にできた失態で、あ

とではどうしようにも方法がない。

面白いのは、ヴィヤールの紙へ畫いた油繪で、これはすこしも變つてゐない。二十餘年前に見た記憶そのまゝであつた。しかしこの繪は紙へ畫いた故に、以前よりガラスをはめてあつた。ガラスのために塵埃が畫面に附着するのを防ぎ得たのだ。その用紙は油繪用に漉かれた紙で、下地塗としての塗料は施されてなく、畫面に残された紙の地色も焼^やきたさず、すこしも新鮮さを失つてゐない。紙へ畫いた油繪でも、ガラスを用ゐると、かくも完全に保存し得ることの記憶を更に深めたのである。

近代油繪畫法にあらはれてきた特殊な技法は、バレット・ナイフの一種なる鏝^こを使用すること、初期油畫技法としては、鏝を使用することは恐らくなかつたと思はれる。それは昔の畫家が、鏝の使用を知らなかつたといふよりも、その頃の繪具が鏝の使用に適しなかつたと見るべきである。チシャンに限らず、その頃の（或はもつと初期の畫家も）畫家達は鏝は使用しなかつたが、指頭を盛んに利用した。筆觸を平らに

するために指先を利用した。その頃の油繪具は、指を用ゐるに適してゐたものらしい。それが現在の如き油繪具を、チューブから押出すと、そのまゝ形のくづれぬやうなものになつたので、鋺を使用することになつたのであらう。

かくの如く技法の變遷と、繪具の變遷とは密接な關係がある。それで今後の技法の變遷には、やはり油繪具製法の變遷がともなふことは、容易にうなづかれる次第であるが、それがどんな風に變遷するか分らぬが、私の希望するところは、まづ第一に畫布の改良である。

現在使用されてゐる畫布の缺點

基底物の記述中において、畫布の製法の一端を述べたが、歐洲において製出された最優等品でも、決して理想的なものとして安心して使用することはできぬ。

油繪が畫かれてから、三、四十年或は七十年も経過して、油繪具の酸化作用の時代もすでに終り、最早繪具の收縮も全然消失した油繪を、スチーム等の暖房装置のある室に懸けておくと、乾燥の度が過ぎるために、その繪の畫布が、極度に伸張する結果繪具は畫布の伸張にともなはず固着力を失ひ、自然現象として、繪具は畫布から剝落するおそれがある。かゝる場合の修復は甚だ困難で、その繪としては致命的な損傷である。今その自然現象を最短期間に人為的に試験するには、舶來上等畫布の一片を選び、その一部分を指でもんで見ても、容易に塗料が剝落せぬ優等品なることを確めて

から、その畫布へ數種の油繪具を、別々に厚目に塗りて、太陽の直射光線に曝すこと五六ヶ月にして、充分に油繪具が乾きたる時、これを爪にてはがすと、畫布の塗料が繪具の方へ附着したまゝ剝落する。そして剝落した部分だけ麻布の生地が現れる。しかし麻布の上には、なほ幾分か膠質のものが残される。

油繪具は、固着力も強く充分に固着してはゐるが、畫布の塗料の固着力が弱いので繪具の方へ塗料がついたまゝ剝落する。なほくはしくいへば、最初麻布へ膠なりカゼインなりを塗つてから塗料を施すのである。しかるにその塗料と膠との固着力が不充分なためか、或は麻布と膠との固着力が悪いためか、剝落した箇處を調べて見ると麻布にも、なほ膠の残存せるを認められるから、おそらく膠の層が半分にわかれて、繪具とともに剝落するものと斷定すべきである。

それならばこの大なる缺點を、どうして防ぎ完全な塗料をほどこすことができるかそれには膠やカゼインの代りに漆をみちびき入れることである。その方法は、すべて

目下研究中にして、今こゝで詳細を記述するまでにいたつてゐない。

しかしつぎのことは判明してゐる。元來油と漆とは親和力も強く、奈良朝時代の作品で、今日までなほ色彩が鮮明に保たれてるところの密陀僧繪具で彩色した手箱類を見ても、下地塗は大概漆である。漆であればこそ、かく長年月を経ても完全に保存にたへ得たのである。勿論大概は、漆の下には麻布が着せてある。しからば麻布と漆との固着力は、既に試験済みというてもよい。たゞ問題は、一方は木地の上に麻布を着せたのに、畫布の方は、昔の方法によらずして、麻布だけの上にたゞちに漆を導き入れる相違点があるにはあるが、この方法によりて研究を進めたならば、必ず世界中における最優良な畫布を得らるゝことゝ確信する

吾國に於ける洋風畫の沿革

順序として一應西洋畫の技法が、吾國に如何にして傳はつたかといふ歴史を、簡単に述べて見よう。

吾國に初めて西洋畫の將來されたのは、多分キリスト教の渡來とその時期を同じうしてゐることと考へる。即ちキリスト教の宣教師等によつて、聖母の像の油繪或は版畫、もしくはそれ等に關係のあるゴブラン織だとかが將來され、また宣教師等のうちには、多少繪を畫いた人もあつたことと思惟される。

信長、秀吉時代には、すでに多數のゴブラン織なども吾國に將來された。それ等のゴブラン織にあらはされた繪により、當時の吾國の美術家、殊に狩野派の畫家に、感化と影響をあたへたであらうといふことが、想像されるものがある。即ちかの桃山時

代の裝飾畫なるものは、これ等のゴブラン織の繪模様を通じて、西洋畫の有する、或特質の影響を幾分うけたものかと思はれる。

支倉六右衛門常長 それから日本人で、かの國にわたつて油繪を學んだ人では、おそらく支倉六右衛門常長が最初の人であつたらしい。支倉常長は仙臺の伊達政宗の家臣で、慶長十八年政宗の旨を奉じて、牡鹿郡の浦を出帆し、まづ最初にメキシコに渡り、ついでスペインにいたり國王に謁し、スペインで洗禮をうけてから更にイタリのローマにおもむき、ローマ法王ポール五世に謁した。そしてローマにとゞまること數年後、歸朝復命したが、日本を出發してから八年目であつた。常長は歸朝後に病を得て元和八年、五拾貳歳で歿したのである。支倉常長は幼名を與市と呼び天性畫を好んだ。

支倉常長はローマに滞在中、繪畫を學んだらしい。常長が日本を出發したのは慶長十八年で、今から約三百二十餘年前、西歴千六百十六年に相當する。即ち十七世紀の

初期であつて、この頃のイタリはヴェニス派の大畫家チントレットが千五百九十四年八十二歳で歿した後であつた。それで支倉常長がローマ滞在の時代は、チントレットの死後二十五年の頃かと考へられる。

支倉常長がローマから歸朝した時に、イタリの畫家の畫いた常長の肖像畫をもち歸へつたのが、今も伊達家に傳はつてゐるであらうと思ふ。私はいまだその繪を見る機會がないが、その畫の寫眞を見ると、常長が下着は洋装らしいものゝ上に、陣羽織のやうなものを着て、背後には幕が畫いてある。その畫の畫風から考へると、チシアンか或はチントレットの流れをくむ畫家の手になつたものらしい。イタリのローマにもこれと似たやうな肖像畫が現存してゐる。おそらく常長の肖像畫ならんと推定される。それから支倉常長自身の畫いた繪といふものは甚だまれであつて、私が見たのは二度で、何れも六枚折の屏風に畫いてあつて、圖様はイタリの貴族が野外遊樂の有様をうつしてある。これはいづれも常長が歸朝後の作とみとむべきもので、畫の材料はこ

とごとく日本のもので、繪絹の上へ日本畫の顏料を用ひ、人物の服裝の模様などは金泥で畫かれてあつた。常長は歸朝してから二年目元和八年に歿してゐる。彼の作品の極めてまれなものも當然のことと思ふ。

前に述べたやうに、常長の繪は顏料も日本繪具を用ひてあつて、油繪とは自ら描法も異つては居るが、人物の顔や衣服、またはそれに畫かれてある風景等皆陰影をほとんどしてあつて、ミニアチュールのやうな感じのする繪で、何れかといへば、その頃のイタリの畫よりもふるい畫風をつたへてゐるやうに見うけられた。

常長以後日本人で、洋畫を學んだ人も必ず澤山あつたことと思はれるが、その頃の西洋畫は、天主教と多少の關係があつたために、キリシタンの禁制は畫家にまでおよび、畫家はおそれてその技術をひそかに隠したので、畫家の名も作品も今日傳はつてゐるものはまれであるが、その中で名の傳はつてゐる人に、山田右衛門作がある。

山田右衛門作 はもと有馬家の臣で天草叛徒の一方の大將であつたが、亂なかばに

して歸順したので、征討の將松平信綱が、彼を救けて江戸にともなつて來た。明暦のころ江戸に放火する者が多かつたので、松平信綱が右衛門作に命じて、放火犯人が、極刑に處せられる圖を畫かして、日本橋のほとりに掲げしめたところ、その畫が西洋畫法によつて寫實風に畫いてあるために、見る者おそれをなし、犯罪がたちまちやんだといふ風な挿話がある。

奥村政信の浮繪 それから八代將軍吉宗の時代となつてから、吉宗の英斷で、從來洋書の輸入は一切禁止の姿であつたのを、その制度をゆるめて宗教に關せざる圖書は交易賣買を自由ならしめたために、西洋畫の研究が盛んになり、書籍にともなつて西洋畫が傳はつて來た。そして寶曆頃の浮世繪畫家等に影響をおよぼし、奥村政信等がはじめたところの浮繪の如きものを出すにいたつた。浮繪といふのは、繪がうかんで見える、即ち遠近法を利用して、建築物などずつと遠くへ見通せる畫法を應用したのである。

圓山應舉 もその寫生畫の點では多少西洋畫法を參考にしたものであらうと考へられる。晩近應舉の畫いた木版畫が、多數發見されたが、この中には浮繪もある。また遠近法を應用した視繪用の繪も多數發見されたが、これはすこぶる精密に描寫された肉筆彩色畫である。

しかしこれ等の人々は西洋畫法を學んだが、まだ油繪を畫いたわけではない。司馬江漢も油繪風のものを書いたが、油繪具はおそらく使用しなかつたらしい。もつとも藤岡博士の説によると、司馬江漢にさきだつて平賀鳩溪即ち平賀源内が多藝のいたすところ油繪具を用ゐて西洋婦人の像を畫いたとされ、その油繪と稱する作は現存してゐるが、私はまだその作品を見てをらぬ。

司馬江漢 西洋畫を専門に研究した人では、司馬江漢であらうと思ふ。司馬江漢も多藝の人であつて、天文、曆、數、博物の學に通じ、當人は繪よりも寧ろ科學の方に自己を重く見てゐたらしくもあるが、歴史上彼の名を不朽ならしめたものは、彼が銅

版書を創めたことと、西洋畫をおこしたがためである。彼の作つた銅版畫は、今日見ても見事なものであつて、彼の時代において、すでにかくの如き立派なものを作つたかと驚歎の外はない。

司馬江漢は江戸の芝に住してゐた。江漢、名は峻、字は君獄、下言道人、春波樓等の號がある。司馬江漢といふ名は、わかひ時に漢學を學んで支那風にならつてつけたものだといはれてゐる。通稱は安藤吉次郎といひ、幼より畫を好み、長じて狩野古信に學び、後轉じて宋紫石に師事したとある。明和の頃、浮世繪木版畫の大家鈴木春信の錦繪が、非常に珍重されたので、江漢もそれにならつてみづから春重と稱して錦繪を作つたが、若し署名がなかつたならば、春信の錦繪と識別するに困難を感じるほどのできばえである。

司馬江漢は銅版術を、平賀源内から習得したのは事實らしく、天明三年に江漢が銅版をはじめて刊行した。それで銅版畫の描法や西洋畫法をなほ深くきはめるために、

長崎に遊學を志し、天明八年四月江戸を發して長崎に行き、翌年四月江戸へ歸着したのである。往還の途中諸方の名所を見物して歩いたので、長崎滞在は僅に一ヶ月位のものであつたらしい。この長崎旅行のことを、西遊旅譚としてあらはしてゐるが、それによると、肝腎の畫のことは、長崎において得るところすくなかつたやうに見える。まへにも述べた通り、司馬江漢は西洋畫風の繪を畫いたが、しかしその主なる作品は、私の見聞した範圍では、油繪ではなくやはり日本繪具を用ゐて、日本繪具に胡粉を交ぜたもので、洋風畫を畫いたものであつた。畫材は西洋風俗も畫いたが、主に日本の風景人物を畫き、とくに江戸の風景を畫いた。隅田川の景色等を畫いたものに傑作がある。文政元年八十二歳にて歿したが、長命を保つたために彼の作品は比較的澤山遺つてゐる。彼の作品の多數は、米國ボストン博物館に所藏されてゐる筈だ。

こゝで私は不思議になるのは、どうして司馬江漢ほどの人が、奈良朝時代以來漆工家のあひだに、油繪具がつたはつてゐた事實に氣がつかかなかつたか。江戸に住して消

防夫の纏まとひに塗られた白い塗料に、どうして意をとめなかつたか。白い塗料を白漆とばかり簡単に考へて、それが油繪具であることに氣がつかなかつたのか。もし漆を混じたらあれだけの白さを出せなかつたことに、どうして氣づかなかつたらう。江漢自身は、種々工風もし研究もしたらうが、つひに使用にたへるやうな油繪具を、作りだすことができずに終つた。江漢もやはり漆といふ名稱が先入主となつて、漆工家のあひだに油繪具が使用されてゐた事實を、發見するにいたらなかつたと見るべきである。

江漢の門からいでて、銅版を作つたものに田善、安田雷洲等がある。

田善 は永田善吉と稱し氏名を約して田善といひ、また亞歐堂と號した。田善もまた長崎に遊んで銅版術をきはめ、優れた銅版畫を作つたのである。

安田雷洲 は江戸の人で、この人も主に銅版畫を作つた。がしかしこの時代は銅版畫はかなり世に行はれたが、油繪にいたつてはおそらく顔料の製法が困難なことから油繪の製作に没頭する人もなく、一時中絶の姿となつたが、西洋畫法を學ぶ者は、こ

の時代の前後を通じて絶えなかつたのである。

幕末の頃の人々 有名な渡邊崋山も西洋畫の描法を學んで、肖像畫の描法に新機軸を出した。

しかるに幕末の世となつて、上下共にますます西洋學藝の精緻なことを覺り、きそつてこれを傳習せんとしたのである。しかして幕府においては蕃書調所即ち後の開成所をもうけ、油繪の研究も更にこのところにおいて行はれた。それで安政四年に川上冬崖といふ人が、繪圖調役となつた。こゝにて文久元年川上冬崖が、畫學出役となつてこゝにはじめて西洋畫學を課したのであつた。

しかしながらそのなすところ、なほ頗る幼稚にして書物によつてその法を研究し、繪具のごときも江漢の遺法によつて、漸く油繪具らしいものを造つたのにすぎなかつた。そしてかかるあひだに、彼の重大事なる維新の革新が行はれた。

明治初期の人々 明治維新の御代となつてから、その初めは西洋畫も實用の方に用

みられたが、純正美術として賞せらるゝ程度にはいたらなかつた。當時西洋畫を學ぶ人は、多くは川上冬崖の門にあつまつた。川上冬崖名は寛、通稱萬之丞、信濃の人、江戸にいでて幕府の家人川上氏の養子となつた。初め畫を大西椿年に學んで太年と號したが、後文人畫を學んで冬崖と改めた。又深く心を西洋畫にひそめ、幕末の世蕃書調所において西洋畫を教授したのは前に述べたが、維新の後下谷御徒町に聽香讀畫樓を設けて、こゝでなほ子弟の薰陶を怠らなかつた。彼が主としてつとめたところは、陸軍省參謀本部に出勤し地圖を製することであつた。彼の門人の多くは、やはり純正美術をきはめるといふよりも、地圖を作るとか或は小學校の畫學の手本を畫くとか、いふ仕事に従ふ者が多かつたのであるが、ひとり高橋由一は主として西洋畫を研究したのである。

高橋由一 は川上冬崖の門人であつたが、なほほかに英國人ワーグマンについても學んだ。

チャールレス・ワーグマン はイギリスのロンドンの人ではじめ武官の職にあつたが、辭してロンドン・ニュースへ畫報として吾國の風俗を掲げた。ワーグマンはもとより大した畫家ではない。けれども吾國の人が、直接に西洋人について畫を學ぶといふことは、近世においては高橋由一等がこの人に教をうけたのに始まつたことと思ふ。

ワーグマンは横濱居留地に住み、吾國に駐ること三十餘年、明治二十三年、五十七歳にして横濱山下町において歿した。

ワーグマンについて學んだ人々の中に、高橋由一の他に五性田芳松、山本芳翠などといふ人があつた。

國澤新九郎 土佐の人で、明治五年に英國ロンドンに渡つて西洋畫を學んだ。そして歸朝後多くの子弟を薰陶した。

川村清雄 明治三年、米國に航し更に佛國を経てイタリのヴェニスに赴き、西洋畫をきはめて、明治十四年に歸朝されて以來數年前高齢物故される迄制作を續けられた。

フォンタネジ 明治九年政府は、工部大學の中に美術學校を置いて西洋美術學生の養成をこととし、西洋畫の教授としてイタリ人フォンタネジを聘した。このフォンタネジといふ人は、畫家として相當に認められた人であつたが、惜しいことには吾國に永く留まらず、明治十一年九月職を辭して歸國した。その作品は東京帝國大學工學部に多數藏されてゐる。

油繪隆盛の原因 明治二十七八年役の頃となつて、新に佛國から歸朝した黒田清輝、久米桂一郎兩氏が、初めて佛國の美術を吾國に傳へたのである。

このフランスの美術が吾國に傳はつたのが、今日の西洋畫の隆盛を見る第一歩であつたと思ふ。フランスの美術はヨーロッパの他の國とは異り、單にフランス一國の美術ではない。パリは正に世界の美術研究所であつて、パリの都には世界中の美術家が集まつてゐて、たがひに競うて研究してゐる。これが他の國においては見られないところで、従つてフランスにおいては繪畫の流派や傾向の變遷が烈しい。この變遷の波

が遠く諸方へつたはるのであるが、この波は時としては、高い思想を打ちよせることもあり、またさほどのものではなく、一時的のあまり價値のない波を打ちよせることもある。

元來美術の製作研究は、その性質自體が流動的のものであつて、ながく一つところに停滯してゐることは不可能なものである。絶えず動きながれて、或時は高く或時は低く、またまれには非常に高い標準に達することがある。

それはひとり美術に限らず、宗教や武具やら建築等一切のものが、その民族の文明とともに、或時は沈滞しました或時は絢爛たる光彩を發する等、さまざまな現象を現しつつ絶えず流動し、進化してゐるのである。

さて吾國現代の洋風畫界をながめるに、吾國に純正美術として、洋風畫が勃興してからなほその日はなほだ淺いのかゝはらず、新興の元氣まことに潑刺としてますます隆盛に赴きつゝあるのである。

洋風畫法中で最も重きをなす、油繪の顔料たる油繪具が、遠く奈良朝時代から吾國に存在してゐた事實に想到する時、油繪が決して西洋の借りものではなく、われ等が祖先から傳へられたものである。このことの新しい確認から出發して、油繪畫法の眞の完成をこころざし、これを立派に解決して、世界の文化に光輝をはなたんとするものこそ、われ等畫家の使命であらう。今や吾國は、未曾有の偉大なる文化を建設せんとしてゐる。この盛時にあたつて、世界文化線上に、燦然たる光彩を放つべき藝術となるべく近き將來に實現させたいものだと希望する次第である。

繪の科學 (終)

昭和十七年六月十日 日初版印刷
昭和十七年六月十五日 初版發行

(三、〇〇〇部)

繪の科學

定價 二圓

出文協承認ア第60364號



著者 山下新太郎
印刷者 井下精一郎
印刷所 井下書籍印刷所

大阪府西區阿波堀通三ノ九
株式会社 錦城出版社
代表者 岡本政治
大阪府西區阿波座中通二ノ四
井下精一郎
大阪府西區阿波座中通二ノ四
井下書籍印刷所

發行所 東京品渡所
編輯部

大阪府西區阿波堀通三丁目九番地
電話新町三二八・振替大阪七〇二八
東京府神田區神保町三丁目六番地
電話九段三〇六・振替東京八二〇八
東京府麴町區永田町二丁目二七
電話銀座六五五五・振替東京八二〇八

會員番號 一〇七五二九番
株式会社 錦城出版社

配給元

日本出版配給株式會社

錦城出版社刊行文藝書目録

尾崎士郎著

殘燈

B六判二八〇頁上製箱入 價一五〇 一五
 灯(ともしび)、貞操工事、渡邊兄弟、激流、擧兵の夜
 伊織と勤兵衛、敵討と戀人、殘燈、以上八篇の最近作を
 収めたもの。正に油の乗り切つた尾崎文學の精粹は、こ
 とごとくこの一卷に集められてゐる。

加藤武雄著

新 生

B六判四〇〇頁上製箱入 價二〇〇 一五
 新生、甘藷縁起、島の親子、伊豆の頼朝、北ノ庄落城、
 石田三成等をはじめ、十三篇の歴史小説を蒐めたもので
 おのづから日本精神の發揚を見ることが出来る。著者が
 はじめて世に問ふ傑作歴史短篇集である。

日比野士朗著

貧しい人生

B六判三四〇頁上製箱入 價一八〇 一五
 「渡海」小宅の戦「療養所の或夜」などの戦記文學と共に
 「貧しい人生」「明治の記憶」「らうたき人」など、し
 みじみとした人生面を示す作もある。歸還作家たる著者
 の新しい一面が、本書によつて見出されるであらう。

細田源吉著

血は愛によりて濃し

B六判四一〇頁上製箱入 價二〇〇 一五
 日支間の戀愛を主題として、民族の血の問題を取扱つた
 長篇小説である。現下時局の認識と、國家意志の體得と
 に目的をおき、日本人の血の問題を深く掘り下げたところ、
 單なる興味本位の小説とは類を異にしてゐる。

獅子文六著

將軍鮒を釣らず

B六判二一〇頁上製箱入 價一・三〇 一五
 將軍鮒を釣らず、兵六夢物語などの最近作をはじめ、明朝に
 して新鮮、しかも氣品あるユーモア短篇をあつめた傑作集。
 戦時下の國民におくる朗かな慰問袋である。

徳川夢聲著

爆雷社長

B六判四〇〇頁上製箱入 價二・〇〇 一五
 怒の雷撃か？笑の爆弾か？爆雷居士と異名をとつたアメリカ
 歸りの奇男子が、一見柔和な青年社員に遂に兜をぬぐ物語。
 珍談奇談百出の長篇ユーモア小説である。

和田 傳著

野に母あり

B六判二八〇頁上製箱入 價一・七〇 一五
 息子を戦野におくつた農村の母親たちを主人公とし、世界に
 冠たる母を描いた長篇小説。他に戦時下農民生活の實狀をユ
 ーモラスな筆で描いた「あによめ」と「空洞」を収めた。

森本岩夫著

足の故郷

B六判四二〇頁上製美本 價二・〇〇 一五
 銃後における都市や農村の生活の中から、純真な人情美を拾
 ひあげ、國家意識と國民精神への飛躍的發動を描いた時局小
 説集。感激あふるる名作揃ひである。

中河與一著

愛の意味

B六判三八〇頁上製箱入 價一・〇〇 一五
 古來より現代に一貫する日本精神のうるはしさを、愛の觀點
 より強調した文藝評論集である。愛の作家たる著者の思想的
 全貌が、本書によつて窺はれるであらう。

白井喬二著 (江崎孝坪装幀)

B六判五〇〇頁上製箱入美本
定價各冊二圓五十錢 ㊦二〇

瑞穂太平記 全五卷

第一卷 上古篇 第二卷 奈良篇
第三卷 源平篇 (以下續刊)

輝く皇國二千六百年史は、巨匠白井氏によつて初めて、説化された。雄大なる構想と、一貫する烈々たる氣魄と、津々たる興味とをもつて、眞の日本の姿がここに展開される。絶好の讀物であると共に、大衆的日本精神讀本でもある。これこそ正に全國民必讀の書だ。

白井喬二 短篇選集 寶永山の話 B六判四八〇頁上製箱入
定價二圓五十錢 ㊦二〇

寶永山の話、月影銀五郎、劍脈賢忠傳、本朝名所傳、築城變などをはじめ、珠玉の如き短篇二十一篇を収む。大衆文藝の生みの親たる著者が、二十餘年間の代表的傑作は、すべて本書にあつめられた。

928
44

17年 7月 20日

開
監
大
濟

終

